

## 志を果たすために

二月四日付のスクールニュースで紹介した水野裕哉君が、本日東京に出発しました。いよいよ力士としての生活が始まります。新しい世界に飛び込むことと同じくらい、親元を離れることが彼を大きくさせることでしよう。

十五歳で親元を離れた裕哉君を考えると恥ずかしい限りですが、私は十九歳で親元を離れ一人で新しい生活をスタートさせました。大学という新しい世界に胸を躍らせる一方で、一人で暮らすことに心細さを感じていたのは事実です。

目が覚めると朝食が準備されている。衣服が洗濯されてたまたまれている。日に干されて布団がフカフカになっていく。練習があれば弁当と茶が準備されている。遅刻しそうな時は送ってもらえる。電話をかければ迎えに来てもらえる。……まだまだあるかもしれないね。親元にいるときには、これらが全て「あたり前」。その「あたり前」がなくなったとき、人は初めてその尊さ、ありがたさに気付ききます。

「他人の飯を食う」という言葉が日本にはあります。他の人の分の飯を食べるという意味ではありませんよ。違う環境に身を置いて生活してみるということ。具体的に言えば、親元を離れて他人の間に揉まれて実社会の経験を積んだり、その苦労を味わったりするという意味です。

ただ単に親元を離れるだけではなく、生まれ育った環境を飛び出し、違う環境に身をおくことで、視野が広がり、考え方が深まります。それが自分の成長に大きく関わってくるのです。

人間は、一生に一度は他人の飯を食うべきだと私は思います。それを十五歳で実行するのか、高校を卒業する十八歳でするのか、はたまた二十歳を過ぎてするのかは人それぞれです。裕也君は最も早い十五歳でそれを経験することを決意したのです。

彼以外にも、瑞浪を離れて進学する生徒がいます。就職であつても進学であつても、瑞浪から遠く離れた新しい環境に飛び込むうとして生徒には、親が近くにいない分、病気やけがに気をつけて、元気でがんばってもらいたいと思います。

合唱曲としても歌われる「ふるさと」。歌詞を読むと、まさしく親元（ふるさと）を離れて夢の実現に向けてがんばっている人が浮かび上がってきますよね。その中に「志を果たしていつの日にか帰らん」という歌詞があります。

裕哉君も「志を果たそう」と瑞浪を旅立っていきました。裕哉君、がんばれ！角界に飛び込んだからには、目指すは横綱だ！

